に見ても高い水準の土木 壮大な事業には、世界的 事業、熊本城の石垣等の

技術がいかんなく発揮さ

この土木技術は、 影響もあり、江戸時代

対露戦争対策ということ る。その後、明治になり、

たさまざまな難条件が付

や太平洋側の荒波といっ

久保田豊、宮本武之輔と

きまとい、ヨーロッパの

をリードしてきたキラ星 いったわが国の土木技術

る。このダムは台湾南部

建設にほぼ一生を捧げ

の灌漑設備として多大の

収された時にも地元の人

銅像のほとんどが金属回 像は、第2次大戦末期、

が生まれるのではないか

が生まれ、哲学的雰囲気

ける」。そこに、ドラマ らかの『折り合い』をつ き合い、これを克服する を受ける。常に自然と向 哲学的でさえあるとの感

気概ある土木技術者は

のではなく、「自然と何

一時ほとんど停止す

もあったが、港湾開発、



日本の国土は、厄介で

鉄道建設等スケールが異

なる大規模土木工事に直

ることとなる。港湾工事 術者から技術指導を受け 面し、欧米からの土木技

られる。

建設の失敗にもそれが見

れている。河川工学の第

者である著者の高橋

術者の気概が縷々述べら に立ち向かっていった技 ろ現場でさまざまな苦労

いう教育の場よりはむし

向かった土木技術者の 国土の条件に果敢に立ち 述べたいことは、厳しい

「気概」である。大学と

った。仙台港(野蒜築港) 服することは不可能であ 技術者もこれを完全に克

国土の70%以上を

長温

している。ここで高橋が

その後、八田は不幸な最

貢献を行った。

しかし、

たちによって守られた。

可馬遼太郎によると、こ

のような先駆者を描き出

都市化研究公室理事長

における、オランダ、ド イツ人技術者からの技術は「土木技術者の気概― 高橋裕(東大名誉教授) ずその姿があったと言わ も、洪水があるところ必

広井勇とその弟子たち 木技術者の気概 れるほどの現場主義で、追った。そのとしの九月

明治政府は、むさぼる 年)」において、わが国 本をまとめた気概に驚か 児たちに簡潔な遺書をの

の建設、江戸や仙台の河 実現させてきた。平安京 高いレベルの土木事業を

指導などがある。

司馬遼太郎はこれを、

(鹿島出版会、2014

何よりも90歳近くでこの

付け替えや運河の建設

てきた。この中で、古来 は大きな苦労を積み重ね 創っていくか、先人たち まれる中、国土をいかに 火山、断層、急流等に囲 なく、複数のプレート、 山林で覆われ、平地が少

よりわが国は世界的にも

学から帰ってきた日本人 ら権威を雇い、次いで留 かし、わが国の地盤条件 巻『台湾紀行』」)。し いる(「街道をゆく第40 吸収した。最初は外国か と交代させた」と書いて ように外国の土木技術を 厳しい国土条件に立ち向 公威、青山士、八田與一、 る広井勇を中心に、古市 者でありかつ教育者であ て書いている。土木技術 かった土木技術者につい (日本工営を創設する) る。八田は東京帝大卒業 な大貯水池鳥山頭ダムの 勤務する。そして、壮大 涯を捧げた八田興一がい その土木技術者の中 台湾のダム建設に生 台湾総督府土木局に 銅像が作られた。この銅 を讃え、生前(昭和6年)、 かって身を投じた。」 鳥山頭ダムの放水口にむ 意と拠金によって八田の 上事に参加した人々の発 こし、衣服をあらためて、 台湾では、八田の功績

代樹(興一妻)があとを あった。」「三年後に外 れて死んだ。五十六歳で 水艦の攻撃をうけ撃沈さ 中、乗船の大洋丸が米潜 洋戦争のさなかの昭和士 うに書いている。「太平 フィリピンにむかう途 七年、陸軍に徴用されて は、前述の「街道をゆく 期を遂げる。司馬遼太郎 一日、身辺を整理し、遺 『台湾紀行』」で次のよ 復することとしている た。犯人は、政治的理由 てクローズアップされる 田の命日までに銅像を修 した。台南市政府は、 から犯行に及んだと自供 銅像の頭部が切断され のむこうに、かれが台湾 場を見つめている。視線 をはき、腰をおろして現 頭の珊瑚潭に水がひろが 人とともにつくった鳥山 結果ともなった。 工木技術者の一人が改め っている。 、図らずも、気概ある 一銅像は、作業ズボン 本年1月、この八田の